

**[B年] 受難節第2主日(2023年3月5日)****【旧約聖書日課】創世記 6章11~22節**

11この地は神の前に墮落し、不法に満ちていた。

12神は地を御覧になった。見よ、それは墮落し、すべて肉なる者はこの地で墮落の道を歩んでいた。

13神はノアに言われた。

「すべて肉なるものを終わらせる時がわたしの前に来ている。彼らのゆえに不法が地に満ちている。見よ、わたしは地もろとも彼らを滅ぼす。

14あなたはゴフェルの木の箱舟を造りなさい。箱舟には小部屋を幾つも造り、内側にも外側にもタールを塗りなさい。

15次のようにしてそれを造りなさい。箱舟の長さを三百アンマ、幅を五十アンマ、高さを三十アンマにし、16箱舟に明かり取りを造り、上から一アンマにして、それを仕上げなさい。箱舟の側面には戸口を造りなさい。また、一階と二階と三階を造りなさい。

17見よ、わたしは地上に洪水をもたらし、命の霊をもつ、すべて肉なるものを天の下から滅ぼす。地上のすべてのものは息絶える。

18わたしはあなたと契約を立てる。あなたは妻子や嫁たちと共に箱舟に入りなさい。19また、すべて命あるもの、すべて肉なるものから、二つずつ箱舟に連れて入り、あなたと共に生き延びるようにしなさい。それらは、雄と雌でなければならない。20それぞれの鳥、それぞれの家畜、それぞれの地を這うものが、二つずつあなたのところへ来て、生き延びるようにしなさい。21更に、食べられる物はすべてあなたのところに集め、あなたと彼らの食糧としなさい。」

22ノアは、すべて神が命じられたとおりに果した。

**【使徒書日課】ヨハネの手紙一 4章1~6節**

1愛する者たち、どの霊も信じるのではなく、神から出た霊かどうかを確かめなさい。偽預言者が大勢世に出て来ているからです。2イエス・キリストが肉となって来られたということを公に言い表す霊は、すべて神から出たものです。このことによって、あなたがたは神の霊が分かります。3イエスのことを公に言い表さない霊はすべて、神から出ていません。これは、反キリストの霊です。かねてあなたがたは、その霊がやって来ると聞いて

いましたが、今や既に世に来ています。4子たちよ、あなたがたは神に属しており、偽預言者たちに打ち勝ちました。なぜなら、あなたがたの内におられる方は、世にいる者よりも強いからです。5偽預言者たちは世に属しており、そのため、世のことを話し、世は彼らに耳を傾けます。6わたしたちは神に属する者です。神を知る人は、わたしたちに耳を傾けますが、神に属していない者は、わたしたちに耳を傾けません。これによって、真理の霊と人を惑わす霊とを見分けることができます。

**【福音書日課】ルカによる福音書 11章14~26節**

14イエスは悪霊を追い出しておられたが、それは口を利けなくする悪霊であった。悪霊が出て行くと、口の利けない人がものを言い始めたので、群衆は驚嘆した。15しかし、中には、「あの男は悪霊の頭ベルゼブルの力で悪霊を追い出している」と言う者や、16イエスを試そうとして、天からのしるしを求める者がいた。17しかし、イエスは彼らの心を見抜いて言われた。「内輪で争えば、どんな国でも荒れ果て、家は重なり合って倒れてしまう。18あなたたちは、わたしがベルゼブルの力で悪霊を追い出していると言うけれども、サタンが内輪もめすれば、どうしてその国は成り立って行くだろうか。19わたしがベルゼブルの力で悪霊を追い出すのなら、あなたたちの仲間は何の力で追い出すのか。だから、彼ら自身があなたたちを裁く者となる。20しかし、わたしが神の指で悪霊を追い出しているのであれば、神の国はあなたたちのところに来ているのだ。21強い人が武装して自分の屋敷を守っているときには、その持ち物は安全である。22しかし、もっと強い者が襲って来てこの人に勝つと、頼みの武具をすべて奪い取り、分捕り品を分配する。23わたしに味方しない者はわたしに敵対し、わたしと一緒に集めない者は散らしている。」

24「汚れた霊は、人から出て行くと、砂漠をうろつき、休む場所を探すが、見つからない。それで、『出て来たわが家に戻ろう』と言う。25そして、戻ってみると、家は掃除をして、整えられていた。26そこで、出かけて行き、自分よりも悪いほかの七つの霊を連れて来て、中に入り込んで、住み着く。そうすると、その人の後の状態は前よりも悪くなる。」

## 「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

## 創世記 6章11～22節

<sup>11</sup>だが、地は神の前に腐敗していた。地は暴虐に満ちていた。<sup>12</sup>神が地を見られると、確かに地は腐敗していた。すべての肉なる者が、地上でその道を腐敗させていたからである。

<sup>13</sup>神はノアに言われた。「すべて肉なるものの終わりが、私の前に来ている。彼らのゆえに地は暴虐に満ちているからである。今こそ、私は地と共に彼らを滅ぼす。<sup>14</sup>あなたはゴフェルの木で箱舟を造りなさい。箱舟には小部屋を設け、内側にも外側にもタールを塗りなさい。<sup>15</sup>その造り方は次のとおりである。箱舟の長さは三百アンマ、幅は五十アンマ、高さは三十アンマ。<sup>16</sup>箱舟には屋根〔別訳→窓〕を造り、上から一アンマにして、それを仕上げなさい。箱舟の戸口は横側に付けなさい。また、一階と二階と三階を造りなさい。<sup>17</sup>私は今こそ、地上に大洪水をもたらす。命の息のあるすべての肉なるものを、天の下から滅ぼすためである。こうして地にあるすべてのものは息絶える。<sup>18</sup>だが、私はあなたと契約を立てる。あなたは、息子たち、妻、息子の妻たちと一緒に箱舟に入りなさい。<sup>19</sup>また、あらゆる生き物、すべての肉なるものの中から、二匹ずつを箱舟に入れなさい。あなたと共に生きるためである。それらは雄と雌でなければならない。<sup>20</sup>それぞれの種類の鳥、それぞれの種類の家畜、それぞれの種類の地を這うあらゆるもの、すべてが二匹ずつ、生き残るためにあなたのもとへとやって来る。<sup>21</sup>あなたは食べることできるあらゆるものを自分のもとに集めなさい。それがあなたと彼らの食物となる。」<sup>22</sup>ノアはすべて神が命じられたとおりに行い、そのように実行した。

## ヨハネの手紙一 4章1～6節

<sup>1</sup>愛する人たち、どの霊も信じるのではなく、神から出た霊かどうかを確かめなさい。偽預言者が大勢世に出て行ったからです。<sup>2</sup>イエス・キリストが肉となって来られたということを告白する霊は、すべて神から出たものです。あなたがたは、こうして神の霊を知るのです。<sup>3</sup>イエスを告白しない霊はすべて、神から出ていません。これは、反キリストの霊です。あなたがたはその霊が来ると聞いて

ていましたが、今やすでに世に来ています。<sup>4</sup>子たちよ、あなたがたは神から出た者であり、彼らに勝ちました。あなたがたの内におられる方は、世にいる者よりも大いなる者だからです。<sup>5</sup>彼らは世から出た者です。そのため、世のことを語り、世も彼らに耳を傾けます。<sup>6</sup>しかし、私たちは神から出た者です。神を知る人は、私たちに耳を傾けますが、神から出ていない人は、私たちに耳を傾けません。これによって、真理の霊と惑わしの霊を見分けることができます。

## ルカによる福音書 11章14～26節

<sup>14</sup>イエスは悪霊を追い出しておられた。それは口を利けなくする悪霊であった。悪霊が出て行くと、口の利けない人がものを言い始めたので、群衆は驚いた。<sup>15</sup>しかし、中には、「あの男は悪霊の頭ベルゼブルの力で悪霊を追い出している」と言う者や、<sup>16</sup>イエスを試そうとして、天からのしるしを求める者がいた。<sup>17</sup>しかし、イエスは彼らの心を見抜いて言われた。「内輪で争えば、どんな国も荒れ果て、家は重なり合って倒れてしまう。<sup>18</sup>サタンもまた内輪もめすれば、どうしてその国は立ち行けよう。というのも、あなたたちは、私がベルゼブルの力で悪霊を追い出していると言っているからだ。<sup>19</sup>私がベルゼブルの力で悪霊を追い出しているのであれば、あなたがたの仲間〔直訳→子ら〕は何の力で追い出すのか。だから、彼ら自身があなたがたを裁く者となる。<sup>20</sup>しかし、私が神の指で悪霊を追い出しているのなら、神の国はあなたがたのところに来たのだ。<sup>21</sup>強い人が武装して自分の屋敷を守っているときには、その財産は安全である。<sup>22</sup>しかし、もっと強い者が襲って来てこの人に勝つと、頼みの武具を奪い、分捕り品を分け合う。<sup>23</sup>私と共にいない者は私に反対する者であり、私と共に集めない者は散らす者である。」

<sup>24</sup>「汚れた霊は、人から出て行くと、休む場所を求めて水のないところをうろつくが、見つからない。それで、『出て来たわが家に戻ろう』と言う。<sup>25</sup>帰ってみると、掃除をして、飾り付けがしてあった。<sup>26</sup>そこで、出かけて行き、自分よりも悪いほかの七つの霊を連れて来て、中に入り込んで、住み着く。そうになると、その人の後の状態は前よりも悪くなる。」

## 黙想のためのノート

## 次主日の教会暦と聖書日課

・3月5日「受難節第2主日」の日課主題は「悪と戦うキリスト」。

・旧約聖書日課は、「創世記」から、「ノアの洪水物語」の冒頭部分。使徒書日課は、「ヨハネの手紙一」から、「霊」を見分けることを教える箇所。福音書日課は、「ベルゼブル論争」を含む逸話箇所。

## 旧約日課(創世記6章より)

・「創世記」は、「聖書」全巻の第一に置かれた文書で、ユダヤ正典では「律法(トーラー)」第一巻として位置づけられる。旧約正典「律法」および「預言者」は、バビロン捕囚期以後に成立した「ユダヤ教共同体」の視点から見た「イスラエル正史」としての枠組みを備えているが、その場合の「イスラエル」は、基本的には「出エジプト記」が描く「モーセの律法」によって基礎づけられる「シナイ契約共同体としてのイスラエル」である。この「イスラエル」は、歴史的にはその一体性が非常に曖昧なもので、おそらく王国時代以前に「イスラエル」という共通のアイデンティティが諸部族間で明確に共有されてはいなかったと考えられる。そのような事実に対して、「イスラエル正史」をもって共通のアイデンティティをもつ「共同体」であろうとする立場から、より古い共通のルーツを遡って示すのが、「創世記」に描かれる「アブラハム、イサク、ヤコブ」ら「族長たち」である。「新約聖書」には、1世紀当時、「ユダヤ教共同体」のアイデンティティとして「アブラハムの子」という表象が用いられていたことが随所に示されている。「創世記」は、その「族長物語」を軸に構成されているが、この族長に先行する人類の始祖、そして世界の始まりにまで遡って「人のルーツ」を物語るのが、1~11章に置かれたいわゆる「原初史」である。

・日課箇所は、6~9章にわたって展開する「ノアの物語」の冒頭部分。古代オリエント世界では、広く「洪水伝説」をはじめとする神話的伝承が共有されていた。その代表的な事例として広く知られているのが「ギルガメシュ叙事詩」である。「ギルガメシュ叙事詩」は、紀元前2600年頃に実在したシュメール人国家・ウルク第1王朝の伝説的な王ギルガメシュを主人公とした英雄譚で、紀元前2000年頃以降、シュメール語のみならずメソポタミア諸言語で広く伝承されてきた。この「叙事詩」の中に、「ノアの洪水物語」とよく似た「洪水譚」が置かれている。ユダ・イスラエルの地域は地理的に洪水とは無縁であり、おそらく、「ギルガメシュ叙事詩」のような伝承文獻に伝えられる「洪水伝説」がもとになって「ノアの洪水物語」が成立したと思われる。

・「ノアの洪水物語」は、実際には、日課箇所に先行する「プロローグ」(6:1~10)から始まる。

・「箱舟」の原語ヘブライ語は「ティバー」。「ノアの物語」(創6~9章)の他に、「出エジプト記」の「モーセ誕生物語」で登場する「籠」も「ティバー」(出2:3、2:5)。

## 使徒書日課(Ⅰヨハネ4章より)

・「ヨハネの手紙一」は、いわゆる「ヨハネ文書」の一つに数えられる書簡文書。「ヨハネ文書」は、「使徒ヨハネ」を指導者として初期教会時代に独自の路線で形成されていた教会共同体が、内部での路線対立や他の使徒の指導下にある教会共同体との間で生じていた対立・軋轢に対処するために著したと推認される一連の文書を指し、「ヨハネ福音書」と三つの「ヨハネの手紙」が相当する。これらの文書の成立過程については議論が続いているが、「ヨハネ福音書」が少なくとも一回以上の改訂を経て現在の正典版に編集し直されたことは間違いない(20章に終結句があるにもかかわらず、21章が追記された形になっていることは、わかりやすい証拠)。「ヨハネの手紙一」は、この「福音書」の原典版が著された後、それによって生じた新たな対立などに対処するために、共同体内の者たちに向けて発信された文書と考えられている。おそらく「ヨハネ福音書」の改訂のうち少なくともその一部は、この「ヨハネの手紙一」の強調する論点から施されていると考えられている。このような成立過程を仮説とした上で本書簡を読み進めていく上で、「ヨハネ福音書」が扱う同主題の内容に関する言説との比較検討は、有効な方法である。

・日課箇所では、教会共同体が教えるのとは異なる言説に惑わされないようにとの勧告をするために、「神の霊」と「反キリストの霊」、「真理の霊」と「人を惑わす霊」など、見分けるべき「霊」の違いが説かれている。本書簡中、「霊」に関する言及は、3:24 から始まって、日課箇所でも集中的に取り扱われ、4:13の言及を経て、5:6~8での集中的な扱いまだがすべてである。すなわち、本書簡で終始、「霊」に対する関心が維持されているわけではない。同様に、「ヨハネ福音書」でも、「霊」をめぐる言説は限定的である。その中で注意を惹かれるのが、「福音書」と「手紙」の両書で取り上げられる「真理の霊」という術語である(6節。福音書では14:17、15:26、16:13)。「真理(アレーテイア)」は、「共観福音書」では限られた用例しか知られない一方、「ヨハネ文書」を通して頻出する用語で、「ヨハネの教会共同体」の神学的立場を反映した術語であると考えられる。「真理(アレーテイア)」は、古典時代以来のギリシア哲学で重要な概念で、通俗的には「永遠かつ普遍的な実体」を意味し、それゆえに、「神に属する事柄」、また、物質的・身体的な実体ではなく「霊魂(プシケ)」によってのみ認識される実体として理解された。このように、「真理」概念は、「霊肉二元論」の発想と結びついて理解されていた。「ヨハネ文書」の「真理」概念、また「霊」概念は、このような二元論とペルシア宗教思想の影響によって、「善悪二神論」に近い表現が随所に見られる。しかし、本書簡では、「神が与えてくださった霊」(3:24、4:13)を信仰者の基礎に据えることによって、二項対立的な二元論に陥ることを避けようとしているのだろう。

## 福音書日課(ルカ 11 章より)

・日課箇所となっている「ベルゼブル論争」に関する逸話は、「共観福音書」が共通して伝えているが、前後に置かれた伝承逸話の配置などの比較から、各福音書で少しずつ異なる焦点の当て方がされていることがわかる。「マルコ」は、この逸話を、イエスの家族(母と弟たち)が訪ねてくるという場面設定から展開し、最終的に「イエスの家族とは誰か」という問いに新しい「信仰の家族」観を提示して見せている(マルコ 3:31~35)。「マタイ」と「ルカ」は、「家族」の主題を注意深く脇に寄せ、代わりに「神の霊」と「悪霊」=「汚れた霊」の問題に主題を集中させている。その際に、「マタイ」が「悪霊」=「汚れた霊」の問題を具体的な同時代の人々の中にある問題として捉えるように仕向けているのに対して、「ルカ」は、具体的な例示を避けて、観念的な言説のみでこの主題を扱おうとしている。

・15 節「ベルゼブル」は、ヘブライ語で「ハエの主(王)」を意味するとされ、「列王記下」にある「エクロンの神バアル・ゼブブ」(王下 1:3)に由来するとされる。もっとも、「エクロンの神」の名は元来、「気高き主」を意味する「バアル・ゼブル」であり、「列王記」は異教の神の名を改変し侮辱している。

・20 節「神の指」という表現は、並行する「マタイ」が「神の霊」としている表現に代わる、「ルカ」に特有のものである。「新約」には類例が見られないが、「旧約」では、モーセ物語中で類例が見られる(出 8:15、同 31:18、申 9:10)。

・24~26 節の「汚れた霊が戻って来た」とは、「マルコ」には見られないので、元来の「ベルゼブル論争」の逸話とは別に伝承されていたのかもしれない。「自分よりも悪いほかの七つの霊」は、「ルカ」が「マグダラのマリア」を紹介する際に用いている「七つの悪霊を追い出していただいた女」(ルカ 8:1)との関連を想像させるもので、「マグダラのマリア」に関する逸話と共に伝えられていた可能性も考えられるが、わからない。

## 来週の誕生日 (3月5日~11日)

## 主日礼拝の讚美歌から

・21-128 番「悪は罪人の」(= II 110)は、16 世紀スイス・ジュネーブの教会改革を指導した J.カルヴァンがフランス語の詩編歌 36 編として作詞。曲は、1525 年発行のストラズブル聖歌集所収のドイツ語詩編歌 36 編のためにマテウス・グライターが作曲。同じ曲が 294 番でも用いられているが、『讚美歌 21』では異なる記譜で用いられてきたとおりに採用。

・21-56 番「主よ、いのちのパンをさき」(= I 187)は、19-20 世紀米国のメソジスト信徒メアリー・ラスベリーの作詞で、夏期セミナーのために「聖書研究の歌」と題して書かれた。曲は、19 世紀米国で讚美歌作曲家として知られた音楽教師シャーウィンが、この歌詞のために作曲。

・21-77 番「パンくずさえ拾うにも」(= I 206「主のきよきつくえより」)は、19 世紀英国の国教会司祭 E.ビカーステスの作詞(同名の息子は宣教師として日本聖公会設立に貢献)。曲は、英国教会のオルガニストであったラングランの作曲で、元来は 21-218「日暮れてやみはせまり」のために作られたもの。

・21-73 番「主よ、平和のうちに」は、19-20 世紀ドイツの讚美歌学者シュピッタが 16 世紀の宗教詩人 J.エングリッシュの「シメオンの讚歌」に基づく詩を改作した歌詞。曲は、ルターと同時代のドミニコ会修士オルガニストのダハシュタインの作曲。22 番も作曲。

## 21-56「主よ、いのちのパンをさき」

## Break Thou the Bread of Life

1. Break Thou the bread of life, dear Lord, to me, / As Thou didst break the loaves beside the sea; / Beyond the sacred page I seek Thee, Lord; / My spirit pants for Thee, O living Word!
2. Bless Thou the truth, dear Lord, to me, to me, / As Thou didst bless the bread by Galilee; / Then shall all bondage cease, all fetters fall; / And I shall find my peace, my all in all.
3. Thou art the bread of life, O Lord, to me, / Thy holy Word the truth that saveth me; / Give me to eat and live with Thee above; / Teach me to love Thy truth, for Thou art love.
4. Oh, send Thy Spirit, Lord, now unto me, / That He may touch my eyes, and make me see: / Show me the truth concealed within Thy Word, / And in Thy Book revealed I see the Lord.

## 21-77「パンくずさえ拾うにも」

## Not Worthy, Lord, to Gather Up the Crumbs

1. Not worthy, Lord, to gather up the crumbs / With trembling hand, that from thy table fall, / A weary, heavy-laden sinner comes / To plead thy promise and obey thy call.
2. I am not worthy to be thought thy child, / Nor sit the last and lowest at thy board; / Too long a wanderer and too oft beguiled, / I only ask one reconciling word.
3. I hear thy voice; thou bidd'st me come and rest; / I come, I kneel, I clasp thy pierced feet; / Thou bidd'st me take my place, a welcome guest / Among thy saints, and of thy banquet eat.
4. My praise can only breathe itself in prayer, / My prayer can only lose itself in thee; / Dwell thou for ever in my heart, and there, / Lord, let me sup with thee; sup thou with me.

## 21-73「主よ、平和のうちに」

## Im Frieden dein, o Herre mein

1. Im Frieden dein, o Herre mein, / lass ziehn mich meine Straßen. / Wie mir dein Mund gegeben kund, / schenkt Gnad du ohne Maßen, / hast mein Gesicht das sel'ge Licht, / den Heiland schauen lassen.
2. Mir armem Gast bereitet hast / das reiche Mahl der Gnaden. / Das Lebensbrot stillt Hungers Not / heilt meiner Seele Schaden. / Ob solchem Gut jauchzt Sinn und Mut / mit allen, die geladen.
3. O Herr, verleihe, dass Lieb und Treu / in dir uns all verbinden, / dass Hand und Mund zu jeder Stund / dein Freundlichkeit verkünden, / bis nach der Zeit den Platz bereit / an deinem Tisch wir finden.